

『徒然草』研究——第一二段を中心として——

A Study on the 12th Passage of the *Tsurezuregusa*

土屋 博映

TSUCHIYA Hiroei

要旨

『徒然草』第一二段は、ある意味で非常に重要な段と考えられる。そのポイントとなるのが、「つれづれ慰まめと思へど」という表現の存在である。

その表現が意味するところは、本書序段と関係が深い。序段の「つれづれなるままに」の状況が「慰」められることは、作者の本来の願いであり、本書執筆の一条件であったという前提が考えられるからである。(本段)の重要性は、その期待された「慰」めが、もつとも可能性を持つていた友人に関し、その願いはかなえられないということがわかってしまったところにある。友人という、もつとも自分を慰めてくれる可能性がある対象が、実はそうでなかったとわかった、つまり現実の世の中には、自分を慰めるものは、まったくないということに気が付いた、そういう一段ということになる。

そして、その「気づき」が、(本段)の表現の質を、具体的ではなく、抽象的なレベルにまで、引き上げたと考えられるのである。通説のごとく、本書が、基本原則として、現在の段の配列にしたがって書き続けられたということであるならば、「随筆」文学としての彼の文章の、最初の、確実な到達点がこの(本段)ということになる。そうであれば、第一二段の価値は、現在のわれわれが考えているよりもはるかに重要だと言いうことになる。

随筆文学としての本書の中で、相対に重要であるという可能性のある(本段)の成立は、どのような思考の遍歴、また思考過程に寄って成立したのか、そして、(本段)が、後に続く段にどのような影響力を持つのか、そして、もちろん、(本段)の重要性を再認識すること、それらを考察していくのが本稿の主旨である。

一、第一二段の本文と問題点

本文

同じ心ならん人と、しめやかに物語して、をかしきことも、世のはかなき事も、うらなくいひ慰まんこそうれしかるべきに、さる人あるまじければ、露違はざらんと向ひあたらんは、ただひとりあるこちやせん。

互いに言はんほどの事をば、「げに」と聞くかひあるものから、いささか違ふ所もあらんこそ、「我はさやは思ふ」など争ひ憎み、「さるから、さぞ」ともうち語らばば、つれづれ慰まめと思へど、げには、少しかこつかたも、我と等しからざらん人は、大方のよしなしごと言はんほどこそあらめ、まめやかかの心の友には、はるかにへだたる所のありぬべきぞ、わびしきや。

※本文は『日本古典文学全集』（小学館）による。以下『全集』と呼ぶ。

次に、『全集』の頭注をあげる。

前段から進んで、さらに心境そのものの問題を主題にしている。対人関係で、期待や要望は多く、それをみたすものは容易にありえない現状、ほとんど絶望的な「わびしさ」を解き放つてくれるのは、結局、孤独な「つれづれ」の境地であり、そこから必然的に、十三段が発想されてくる。〔『全集』頭注〕

この注では、「前段」との関連を認めている。また「心境そのものの問題を主題」ともとらえている。そして、「必然的に、十三段が発想されてくる」と、続く後段との関連も認めている。

この注で、気になるのは、「ほとんど絶望的な『わびしさ』を解き放つ

てくれるのは、結局、孤独な「つれづれ」の境地であり」の部分である。本当に「絶望的」なのか、『わびしさ』を解き放つてくれるのは、結局、孤独な『つれづれ』の境地「なにか」ということである。

『全集』頭注では、以上のような問題点を見出すことができた。

二、先学の論と問題点

1、全注釈¹⁾

この段は、遁世者、沙弥兼好の友人論・友情論を述べたものであって、さまざまな場合の友を心に描き、それらの友が「まめやかかの心の友」（これは、彼の理想として存するのみで、現実にはあり得ない）を基準にして見ると、すべて物足りないゆえんを、きわめて心理的、経験的に述べられているのである。旧注では、「同じ心ならん人」を上、「つゆ違はざらんと向かひあたらんは、ひとりある心地やせん」というような人を下、「たがひに言はんほどの事をば…少しかこつ方も我と等しからざらん人」を中とし、上・中・下の三品の友を論じたというのは、合理的分析としては徹底しているが、表現そのものとしてはどうであろう。二つの段落のうち、前は、「同じ心ならん人」のないところからくる孤独感が、後は、「つれづれ慰む」程度の話し相手に見いだされる「少しかこつ方も我と等しからざらん」人の状態に接した時のわびしさが、それぞれ強調されているのであって、自己の真情にもとづいて、まことの心の友の見いだされないわびしさを反省しているのが、この段の表現というべきであろう。〔『全注釈』本文〕

〈本段〉が「友人論・友情論」だという。これは各学説に共通である。

そして、理想として、現実には存在しない「まめやか心の友」を「基準にして見ると、すべて物足りないゆえんを、きわめて心理的、経験的に述懐している」とまとめる。「心理的、経験的に」という表現が必要なのかという疑問はさておき、それ以外は理解できる。

次に、「旧注」から、「同じ心ならん人」を上、「つゆ違はざらんと向かひみたらんは、ひとりある心地やせん」を下、「たがひにく少しかこつ方も我と等しからざらん人」を中とするのについては、「合理的分析としては徹底しているが、表現そのものとしてはどうであろう」と疑問を投げかける。「表現そのものとしてはどうであろう」の意図するところが不鮮明であるが、たしかに「合理的分析」は表現としては、うまいのだが、出来過ぎていてという感もある。たとえそうだとしても、作者の兼好自身にそう意識して書いたかは疑問が残る。

最後に「自己の真情にもとづいて、まことの心の友がみいだされないわびしさを反省しているのが、この段の表現」とまとめている。「反省」という表現が、この場合適するかどうかはともかく、大体はそのとおりである。以上につき、注意したい。

2、諸注集成⁽²⁾

この段は「心友得難し」という極端な孤独感を訴えたもので、推理の乱れから、すこぶる難解になっている(橋、通釈の大意)「友え難し」のなげきは、人を孤独においやる。寿抄、文段抄、集説は、「よき友の中の

差」を述べたものと解し、句解、参考は、揚子法言にいう「心友、面友の差」をいうものとした。読解、盤抄、大全は、「上中下の差」あることをいっているとした。(『諸注集成』本文)

当然のことながら、内容は「諸注」の「集成」となっている。ほとんどの諸注からはたいして得るところもないが、冒頭の「この段は、『心友得難し』という極端な孤独感を訴えたもので、推理の乱れから、すこぶる難解になっている」という部分には注目してみたい。気になるのは「推理の乱れから、すこぶる難解になっている」というのは事実か、ということである。「推理の乱れ」であろうか、「すこぶる難解であろうか」ということを考えてみたい。

また、『諸注集成』の編者田辺氏は、〈本段〉の後半の構成について見解を詳述しておられるが、本稿では、参考とするのにとどめておく。

3、徒然草講座(第二卷)⁽³⁾

この段は、一般には友人論として読まれているが、「同じ心ならん人」の「ん」の意味するところは、「かこつ方も我と等し」くする理想の世捨人に寄せる夢想と、夢想の不可能を認識する孤独者の諦念とを語っているのであって、世俗をはみ出して生きることの「わびしさ」を自己確認する文章であったのである。こうして、「同じ心ならん人」を外に求めることを断念した作者が、「をかしき事も世のはかなき事も、うらなく言ひ慰まん」ために、「心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつ」けたのが、以後に引き続き続く章段なのである。

隠遁者にとつて、物語をすることは、ただ「つれづれ慰む」ためのものでしかなく、理非を正したり、考え方の優劣を決するための論争など始めから無用なはずである。それを意見が違ふからと言って『我はさやは思ふ』など争ひ憎むことは、隠遁者の世界に世俗者の立場を持ちこむことになってしまう。前段が庵の世界の理想と生活者としての現実との亀裂を対象化した文章であったのに対し、この段が遁世者の理想的人間関係を寄せる想いと「さる人あるまじければ」という現実の認識を語ることによって、これまた実存の不条理性に目ざめた者の「わびし」さを語る点で前段と照応しているのである。『講座』本文)

前半は、単純な「友人論」ではないという主張である。たしかに「友人論」と決めつけてしまうと、それで理解できたような気分になる。注意したい。

次に、「同じ心ならん人」と「ん」が存在することに注目している。たしかに「ん」がやたらに多い文章であるので、これも同様である。

また、「世俗をはみ出して生きる」ことの『わびしき』を自己確認する文章であったのである。「に目をむけてみたい。筆者の言うごとく、「自己確認」程度の表現が穏当なのかとも思う。

そして、「同じ心ならん人」をこの世にもとめることを断念した作者が、その心を「言ひ慰まん」ために、『徒然草』を書いたのだと(※序段と強く関連するという気持ちが強いついこと)とらえている。これは、読みかえれば、(本段)は本書成立に大変な位置を占めているということになる。もしそうであれば、大いに賛同したい。※部分、土屋注(以下同

じ)

後半は、「実存の不条理性に目ざめた者の『わびし』さを語る点で前段(※第一段)と照応している」とあり、前段との関連を認めている。これもその通りだと思う。関連については確認していききたい。

4、「徒然草」研究と講説⁽⁴⁾

ここで兼好は、人と交わす対話の性質を三つに分けて考えている。そして、対話の中でお互いが心の琴線に触れ、心を許して語ることができ「心の友」には、邂逅しがたいことからくる、寂寥感・孤独感をふと告白している。

第一節では、自分と同じ心をもった相手と心を開放しあつて、「うらなく」語り合う喜びは、日常の現実では経験することが稀有なことを述べる。自分の心にヴェールをかけ、相手の感情に神経を配って対話している場合の、窮屈で無味な状態を、「ひとりある心地」としている。

第二節では、人と議論する価値・楽しみなどを認めながらも、自分とは多少意見の違う人と交わす話題の性格は、人生の深い問題などではない「大方のよしなしごと」の範囲にとどまってしまう傾向を指摘する。本当の意味での「心の友」とは、隔絶している「わびしき」寂寥感を覚えるという。

草庵の兼好も、寂寞とした人生の孤独からは逃れたい。閑静で自由な隠遁の生活を生彩あるものにするのは、「心の友」の存在であり、それとの対話のなかで発見する相互理解の喜びであろう。思想や意識や趣味を

共有できる友には、出あいがたい日常の現実には、兼好の孤独がある。
(中略)

このように、「心の友」の存在の有無についても、『徒然草』のなかで、兼好は複線的な記述をしていることに注意したい。とすれば、これは「心の友」の得がたきことへの絶望ではない。日常の次元で、「心の友」への希求をふと覚えた人生的な孤独なのであろう。

『研究と講説』本文

全体的に素直なわかりやすい捉え方である。一般的にはこれが認められていると思う。

「対話の性質を三つに分けて考えている」『心の友』には、邂逅したいことからくる、寂寥感・孤独感をふと告白している」とあるように、わかりやすい。

第一節(前半)では、同じ心を持った相手がいないので、気配りする相手との対話は「自分の心にヴェールをかけ、相手の感情に神経を配って」いるもので、その「窮屈で無味な状態を、『ひとりある心地』としている」という。

第二節(後半)では、「本当の意味での『心の友』とは、隔絶している『わびしき』寂寥感を覚える」ととらえる。「思想は意識や趣味を共有できる友には、出あいがたい日常の現実には、兼好の孤独がある」とまとめる。無難なまとめ方であると思う。参考としたい。

さらに、「これは『心の友』の得がたきことへの絶望ではない。日常の次元で、『心の友』への希求をふと覚えた人生的な孤独なのであろう」と

述べるが、「絶望ではない」と「ふと覚えた人生的な孤独」という部分には、賛意を示したい。

5、徒然草の鑑賞と批評⁽⁵⁾

友人論として、もつとも有名な章段の一つである。気持ちのびったり合う人というのは、なかなか得がたいものであることは、人につき合えば合うほど実感することであるが、兼好も、まずその得がたさに触れて、だから現実には相手の意向に反しないよう気をつかって対座している時の孤独な感情をまず指摘している。

ついで友人の型として、おたがいに話し合うことは何によらずなるほどと傾聴に値するものの、少しく意見のちがっている人の場合は、しんそこ胸のうちを明かして議論すると、所在なさがまぎれるかと思えるが、しかし結局は、不平不満も自分と共通している人でなければ、普通の雑談相手にはいいが、「まめやか心の友」としてはかけ離れた存在になると述べている。

そうすると、ここである「まめやか心の友」というのは、第一に気持ちしがびったり合うこと、第二に不平不満も自分と共通すること、でいいのだが、実のところ、これは「まめやか心の友」の条件であるように見えてそうではない。

「同じ心ならん人」というのは、そもそもが非常に稀な存在なのである。だから、根本的には、真実の心の友というものは得られぬという絶望感があって、この文章を書いていると考えるべきであらう。(中略)

これは、結局、第一の条件も第二の条件も、必要なことではあるが、それが機械的にみたまされればいいというわけのものではないからである。(中略)

もつとも、ここまで「まめやかな心の友」を見いだしがたいと指摘したあとで、ただちに人間同士の交際の秘訣をいうわけには行かないであろう。続く第一三段は、生ま身の人間を離れて、古人の中に友を求めた文章となっている。

『鑑賞と批評』本文

「現実には相手の意向に反しないよう気をつかって対座している時の孤独な感情をまず指摘している」ととらえる。また、「まめやかな心の友」の条件について問題提起をしている。その問題提起は、「真実の心の友というものは得られぬという絶望感があって、この文章を書いていると考えるべきであろう。」というものである。「絶望感」とらえるべきかどうか、本質にかかわる問題である。心して受け止めたい。

また、「続く第一三段は、生ま身の人間を離れて、古人の中に友を求めた文章となっている」と述べている点、「第一三段」との関連を認めている。賛同したい。

三、第一二段の検討

本文

同じ心ならん人と、しめやかに物語して、をかしきことも、世のはかなき事も、うらなくいひ慰まんこそうれしかるべきに、さる人あるまじ

ければ、露違はざらんと向ひあたらんは、ただひとりあるこちやせん。

互いには言はんほどの事をば、「げに」と聞くかひあるものから、いささか違ふ所もあらん人こそ、「我はさやは思ふ」など争ひ憎み、「さるから、さぞ」ともうち語らばば、つれづれ慰まめと思へど、げには、少しかこつかたも、我と等しからざらん人は、大方のよしなしごと言はんほどこそあらめ、まめやかな心の友には、はるかにへだたる所のありぬべきぞ、わびしきや。(第一二段)全文

〈本段〉は前段と後段の二段に分けてとらえるのが一般である。ただし、二段とはいえ、単に二つの文から成立しているだけのこともある。

〈本段〉は難解だという説がある⁶⁾、それはこの二文、とくに後のほうが、異常なほど長い文であることにも由来する。

まずは前段、最初の一文から検討していく。基本的に『全注釈』の「注釈」をベースに、検討し、自己の見解を加えて行くことにする。他の文献は随時参考にする。

1、同じ心ならん人と、しめやかに物語して

『全注釈』には、「ん」について、「この段には、助動詞『む』(ん)とその活用形の使用回数が多いことは、注目すべきであって、十一回に及んでいる。これは、兼好が、心のうちにさまざまに考え思ったことを、断定的、原理的ではなくて、仮定的、想像的に述べようとしているからであろう。ここで『同じ心ならん人』といったのも、そういう友を心の

うちに思い描いたためであろう」と記されている。使用回数が多いことはその通り。「断定的(原理的)」ではなく、「仮定的(想像的)」に「述べようとしている」というのもその通りである。

それを受けて、「同じ心ならん人」とは、自分とまったく気持ち一致する人間を暗示するということであろう。そこで、「心ならん」の「ん」が気になるが、「同じ心なる人」と断定できず、ぼかして言ったものと考えてよい。断定をさけて、ぼかして(婉曲的に)述べたものとすれば、現実にはありえないことを仮定していることになる。ここがポイントとなる。

「しめやかに」とは「しんみりと」の意である。

2、をかしきことも、世のはかなき事も

『全注釈』には、「こうした世間の無常を語り合う『同じ心ならん人』の存在せぬ嘆きが、兼好をして、この個所を書かせたと見るべきである」とある。この解釈は、以下に続く流れ全体を指している。賛同したい。

「をかしき」と「はかなき」は、明と暗の、対照的な言葉である。つまり、「世の中の、酸いも甘いも、あらゆる事」という意味である。「世の」の位置は本来、「をかしき」の前にあるべきかと思われるが、一応注意しておきたい。

3、うらなく

「うらなく」は「裏無く」で、「隠すことなく」という意味である。『集成』には、4とからめて、「へだてなく語り合い、心をなぐさめあつたなら、それこそ」とある。

4、いひ慰まんこそうれしかるべきに

「いひ慰まん」の「ん」は後に体言が隠されている表現で、仮定(婉曲)を表すことが多い。「いひ」は「話して」という意味。「慰ま」は、「気が晴れる、すつきりする」という意味である。話をして、気が晴れたら、それはうれしいはずであるが、というのである。つまり「気が晴れることは無い」ということを、後の表現を待たずに暗示しているのである。

『全注釈』には、「うれしかるべきに」の「に」について、「それまでの文脈を一応まとめた上で、以下それに反した事柄を述べる時に用いる詞で、兼好にはよく使われている」とある。

5、さる人あるまじければ

「さる」は「そういう」の意味。つまり「同じ心なる(ならん)人」をさす。「まじければ」は、「べし」の打消しの意味で、いわゆる「打消当然」の助動詞。もちろんその前の「べし」に対応している。

『全注釈』には、「正徹本・常縁盆では、『さる人あるまじけれど』となるが」とある。一応の注意はしておきたい。

6、露違はざらんと向ひぬたらんは

「露違はざらんと」は、「まったく(相手と、意見など) 違わないでいよう」という意味である。「向かひぬたらんは」は、「向かい合つてすわっていたとしたならば」ととらえておく。「たらん」の「ん」は本段に頻出する「仮定(婉曲)」の助動詞である。

『集成』には、「少しも相手の心にそむくまいと思いつつ対談しているのは」とある。

7、ただひとりあるこちやせん

「ただひとりある」というのは「孤独である」ということ。「こちやせん」とは「気持ちができるだろうか」という意味。「せん」の「ん」は推量の助動詞である。この部分から、作者が「孤独感」を抱いたことは明確である。

8、互ひに言はんほどの事をば

「互ひに」とは「話し相手と」ということ。「言はんほどの事をば」は「言ふ事を」に作者がニュアンスを添えたもの。「ん」は、仮定(婉曲)で形式名詞の「ほど」も婉曲(ぼかし)である。「をば」の「ば」は「を」の強意。お互いに言いたいことがあるれば、その事を、といった内容である。

『全注釈』には、『言いたいことを言おう』というくらい強い意味を含んでいるようである」とある。それならば「言はんとする事をば」とすれば良いのであって、「言はんほどの事」のニュアンスは、〈本段〉

全体を覆う「ん(む)」による、仮定の意識の一環ととらえねば、不都合なではあるまいか。

9、げに「と聞くかひあるものから

「げに」は、「なるほど」と納得する意味。「聞くかひあるものから」の「聞くかひ」は「聞く意味」である。「ものから」は、接続助詞で、前後により順接にも逆接にもなる。

『全注釈』には、「(こ)は」逆接の接続助詞」とある。

10、いささか違ふ所もあらんこそ

「いささか」は、「ほんの少し」。「違ふ所」は「考え・意見が」異なった所。「あらん人」の「ん」は仮定(婉曲)で、「あれば、その人(と)」の意味。「こそ」は強意の係助詞である。

『集成』には、「多少は意見の違っているだろうと思える人は」とある。

11、「我はさやは思ふ」など争ひ憎み

「我はさやは思ふ」の「さ」は指示語、「そのように」の意味。「やは」は反語。「自分はそのように(あなたの言うように)は思わない」ということ。「争ひ憎み」は「言い争い、非難し」の意味である。話し相手と言いたいをするのである。

「争ひ憎み」について、『全注釈』には、「言い争った上に、相手を憎らしく思って、とがめなじるのである」とあるが、『集成』(文段抄)に、

「この『にくみ』は、「妬みにくむにはあらず。ただ少しがひに争ふ心なり」とあるほうがよい。「憎らしく」（全注釈）はいらないだろう。

12、さるからさぞ」ともうち語らば

「さるからさぞ」の「さる」は指示語で「そうであること」。「さぞ」の「さ」も指示語。「ぞ」は強意の助詞。実際には具体的な部分を「さ」の指示語で抽象化する効果がある。「そうだから、そうなんだ」ということ。『集成』（大系・西尾⁹）には、「こうだから、こうなのだ」とある。「うち語らば」の「うち語らば」は「親しく話す」こと。「ば」は順接仮定条件。「親しく話し合ったならば」の意。

13、つれづれ慰まめと思へど

4の「いひ慰まんこそうれしかるべきに」と関連する。「つれづれ」が消えてくれるだろうかと思われるが、といった内容。「慰ま」は「心が晴れる」くらいの意味。「め」は推量（意志）の助動詞。「ど」は逆接の助詞。

14、げには

「げに」は「現に」で、「実際には」の意味。仮定「ん」のついた内容を受け、「現実には」のニュアンスを加える。

『全注釈』には、「まことに、ほんとうに、ほんとうのところの意に解される」とあるが、従い難い。9の「げに」とは質的に異なると考える。本例の「げに」には「は」が接続している。この「は」を感動ととらえ

るかどうかであるが、考察はここではひかえる。

15、少しかこつかたも、我と等しからざらん人は

「少しかこつかたも」の「かこつ」は「不満を述べる」意味。「我と等しからざらん人は」の「等しからざらん人」の「等しから」は、「同じレベルである」という意味。「ざら」は打消しで、「ん」は仮定（婉曲）。自分と同等のレベルでないような人だったら、という内容。

『全注釈』には、『少し』は、下の『等しからざらん』に係る「とあるが、判断は難しい。

こころへんが、難解な文章と言われる所以である。

ちなみに『集成』では、「難語。いまだ氷解されていない」とある。

16、大方のよしなしごととも言はんほどこそあらめ

「大方のよしなしごと」の「大方」は、「普通・一般」の意味、「よしなしごと」は「由無し」に「こと」が複合し、「つまらないこと・どうでもいいこと」の意味。「言はんほどこそあらめ」の「言はん」の「ん」は仮定（婉曲）。「ほど」は、ぼかし。「こそ」は強意の係助詞で、結びが、推量の助動詞の「め」。「あり」は「それでよい」といった意味。ありきたりなどでもないことを話すなら、そのような場合はよいが、という内容。

『全注釈』に、「ここにも、序段と同じく、『よしなし事』が出ているのは興味深い」とある。序段との関連を意味するものとして、重要である。

『集成』には、「なみなみのつまらぬことを語りあっているうちはよいが」とある。

17、まめやか心の友には、はるかにへだたる所のありぬべきぞわびしきや

「まめやか心の友」は「真の心の友」のことで、1の「おなじ心ならん人」のこと。「に（は）」は比較の助詞。「はるかにへだたる所」とは精神的な隔たりである。「ありぬべきぞ」の「ぬ」は強意の助動詞で、「べき」は当然の助動詞。「ぞ」は強意の係助詞。絶対にあるわけがないということをも、これでもかとばかりに強調している。「わびしき」は「ぞ」の結びで「や」は詠嘆。「やりきれないことだよ」と慨嘆している。

本章の最後に、『集成』の〈本段〉への見解を掲げておく。

「思维的な論文構成の胎動期の文体であるから、現代風な知的理解を求めようとするのは、無理ではあるまいか。問題点の『はかなきこと』『つゆたがはざら』『げに』『争ひにくみ』『さるからさぞ』『げには』『かこつた』『心の友には』の探究とともに、文脈の呼応のみこむことが必要であつて、相当、手におえない文章である。なお後考を待つ」（『集成』本文）

四、前後の段の検討

ここでは、本稿で取り上げた「第二段」〈本段〉の前段である第一一

段から、「第二段」〈本段〉を含め、第一七段までの各段を取り上げ、その関連の度合いを中心に論じていくことにする。

神無月の比、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里にたづね入る事侍りに、遙かなる苔の細道をふみわけて、心細くすみなしたる庵あり。木の葉に埋もるる懸樋の雫ならでは、露おとなふものなし。関伽棚に菊・紅葉など折散らしたる、さすがにすむ人のあればなるべし。

かくてもあられるよと、あはれに見るほどに、かなたの庭に大きな柑子の木の、枝もたわわになりたるが、まはりをきびしく囲ひたりしこそ、少しことさめて、この木なからましかばと覚えしか。（第一一段）

※傍線部、筆者による。以下同じ。

〈本段〉の直前の第一一段である。

「心細くすみなしたる庵」は作者の好むところである。この部分が、後の「かくてもあられるよ」に関連する。

「かくて」が前述の「庵」の様子を指し示す。「あられるよ」とは、人為的なものを排除して、自然のままに暮らしていることに感動しているのである。

「あはれに見るほどに」の「あはれ」は、しみじみとした感動である。作者にとって最高級の感動と言ってもよい。

以上の感動が、最後の部分に来て一変する。「まはりをきびしく囲ひたりし」という、「柑子の木」をとられたくないという人為的行為が作者の感動を台無しにしたのであろう。

「少しことさめて」という、しらけた気分になった。「この木なからましかば」は詠嘆的表現と受け取るべきだろう。作者にとつて理想的な生き方をしていると見られた人物が、結局は俗人にすぎなかったということによる「幻滅」である。

この段の幻滅は、次の〈本段〉との関連をもたらししている。

〈本段〉同じ心ならん人と、しめやかに物語して、をかしきことも、世のはかなき事も、うらなくいひ慰まんこそうれしかるべきに、さる人あるまじければ、露違はざらんと向ひみたらんは、ただひとりあるここちやせん。

互いと言はんほどの事をば、「げに」と聞くかひあるものから、いささか違ふ所もあらん人こそ、「我はさやは思ふ」など争ひ憎み、「さるから、さぞ」ともうち語らば、つれづれ慰まめと思へど、げには、少しかこつかたも、我と等しからざらん人は、大方のよしなしこと言はんほどこそあらめ、まめやか心の友には、はるかにへだたる所のありぬべきぞ、わびしきや。(第一二段)

〈本段〉と前段とは、強い関連があるわけではない。そういう意味で、連続して書かれたものとは言い切れない。ただ前段の後に、作者が意図的に〈本段〉を置いたとしたら、それには意味が生まれてくる。

「同じ心ならん人」とは、既出の「もちろん作者と、いわゆる「心友」にあたる。心友と「いひ慰まん」としたらうれしいのだが、「さる人あるまじけれ」なのだと言いつ切っている。

『全注釈』の指摘のように、「よしなしごと」が序段にあることは、〈本段〉の作者の「心理」と一致しており、〈本段〉が序段と関連性をもつことの一証と考えられる。

「つれづれ慰まめ」が、既出の「いひ慰まん」と同様に、作者の本書執筆時の大なる要因と考えられる。

また、最後に「心友」を「まめやか心の友」と言い、「真友」とも重ね、そういう人間はいないから「わびしきや」と詠嘆している。この「心友」「真友」がないことへの嘆き、「わびしきや」というところが、前段と同類なのである。〈本段〉の成立に、前段の「栗栖野」の具体的経験が生きているということになる。

ひとり灯のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなうなぐさむわぎなる。文は、文選のあはれなる巻々、白氏文集、老子のことば、南華の篇、この国の博士どもの書ける物も、いにしへのは、あはれなる事多かり。(第一三段)

この段では、冒頭の一文にポイントがある。まずは「ひとり灯のもとに文をひろげて」だが、「ひとり」と「文」に注目したい。他人との交流をはからず、読書をするということである。

次に「見ぬ世の人を友とするぞ」である。「見ぬ世の人」が「友」であるという。現実と眼前にいる、俗世間の人間などは、友にできないという背景がある。

最後に「こよなうなぐさむわぎなる」である。「なぐさむ」とある所が

ポイント。〈本段〉では「つれづれ慰まめと思へど」であった。現実には不可能な「慰む」状態が、「見ぬ世の人」との、読書を通じての交流なら、それが可能となることを述べている。

第二文では、「いにしへのは、あはれなる事多かり」となっている。「いにしへ」は時間的に離れた世界、そこに「あはれなる」という最高級の感動を用いて評価している。

〈本段〉の孤独感が、現実を離れた、時間的にも空間的にも、遠く隔たった「見ぬ世の友」と読書を通じて、解消されるということが述べられている。

和歌こそなほをかしきものなれ。あやしの山がつのしわざも、いひ出づればおもしろく、おそろしき猪のししも、「ふす猪の床」といへば、やさしくなりぬ。

この比の歌は、一ふしをかしく言ひかなへたりと見ゆるはあれど、古き歌どものやうに、いかにぞや、ことばの外に、あはれに、けしき覚ゆるはなし。貫之が「糸による物ならなくに」といへるは、古今集の中の歌層とかや言ひ伝へたれど、今の世の人の詠みぬべきことからは見えぬ。その世の歌には、すがた・言葉、このたぐひのみ多し。この歌に限りにてかくいひたてられたるも知りがたし。源氏物語には、「物とはなしに」とぞ書ける。新古今には、「このころ松さへ峰にきびしき」といへる歌をぞいふなるは、まことに、少しくだけたるすがたにもや見ゆらん。されどこの歌も、衆議判の時、よろしきよし沙汰ありて、後にも殊更に感じ、

仰せ下されける由、家長が日記には書けり。

歌の道のみ、いにしへに変わらぬなどいふ事もあれど、いさや。今も詠みあへる同じ詞・歌枕も、昔の人の詠めるは、さらに同じものにあらず。やすくすなほにして、姿もきよげに、あはれも深くみゆ。

梁塵秘抄のえい曲の言葉こそ、また、あはれなる事は多かれ。昔の人は、ただいかに言ひすてたることくさも、皆いみじく聞ゆるにや。(第一四段)

この段は、「慰む」という言葉は用いられていないが、第一三段のテーマである書物(読書)から、和歌へという流れが認められる。また現在の和歌を、「古き歌」と比較して、「あはれに、けしき覚ゆるは無し」と、「あはれ」を用いているところも関連がある。

また続いて、「昔の人の詠めるは」「やすくすなほにして、姿もきよげに、あはれも深くみゆ」と、「昔の人」と「あはれ」をセットで表現している。

次に、「梁塵秘抄のえい曲の言葉こそ、また、あはれなる事は多かれ」と、「梁塵秘抄」と「あはれ」をセットで表現している。

ところで、〈本段〉との関連を認める上で、これ以後に続く段のうち、第一五段から第一七段の三段は、一つの段として、まとめてとらえる方がよいのではないかと考えていることを、ここで前もって述べておく。

いづくにもあれ、しばし旅たちたるこそ、めさむる心ちすれ。

そのわたり、ここかしこ見ありき、みなかびたる所、山里などは、いと目なれぬ事のみぞ多かる。都へたよりもとめて文やる。「その事かの事、便宜に忘るな」などいひやるこそをかしけれ。

さやうの所にてこそ、万に心づかひせらるれ。持てる調度まで、よきはよく、能ある人、かたちよき人も、常よりはをかしとこそ見ゆれ。

寺・社などに、しのびてこもりたるもをかし。(第一五段)

この段は、四段落から成り立つ。

第一段落は、「旅たち」という前提で始まる。それが「めさむる心ち」がするという。

第二段落は、旅の続きで、「目なれぬ事のみぞ多かる」と述べ、その次に「をかし」でまとめる。

第三段落は、さらに旅の続きで、最後に、「常よりはをかしとこそ見ゆれ」でまとめる。最後に第一段落同様、「をかし」がくる。

第四段落は、旅と関連させ、「寺・社」と「をかし」がセットで用いられている。

この第一五段は、全体に、「あはれ」ではなく「をかし」の世界で統一されている。

神楽こそ、なまめかしく、おもしろけれ。

おほかた、ものの音には、笛・箏・篳篥。常に聞きたきは琵琶・和琴。(第一六段)

この段は、「寺・社」の連想から「神楽」が導かれていると考えられる。

第一段落(第一文)は、「神楽」を「なまめかしく、おもしろけれ」とまとめている。

それを受けて第二段落では、「ものの音」として「笛・箏・琵琶・和琴」をあげている。これも「あはれ」ではなく「をかし」(おもしろし)の世界で統一されている。

山寺にかきこもりて、仏に仕うまつるこそ、つれづれもなく、心の濁りも清まる心地すれ。

(第一七段)

この段は、「旅」「寺・社」の流れを受けている。たった一文だが、「山寺にかきこもり」で、「仏に仕うまつる」ことこそが、「つれづれもなく、心の濁りも清まる心地」がすると評価している。「つれづれもなく、心の濁りも清まる」とあるのがポイントである。旅を続けて「をかし」という気分になったが、やはり「山寺」で「仏」をいえることが、「つれづれ」がなくなり、「心の濁りも清まる心地」になるというのである。「心の濁りも清まる」といいうのは、「慰む」ということに他ならぬ。「つれづれ(もなく、心の濁りも清まる)」という表現が、序段とも(本段)(第二二段)とも関連するという点には大いに注目したい。

以上のことから、第一五段から第一七段、各段は密接につながっており、それらをばらばらに鑑賞するのでは、本書の本質に迫ることはできないはずがない。とくに強調しておきたいのは、第一五段から、第一七段は同一段として鑑賞しなくては、きれぎれになってしまう、第一七段と

いう作者が一番伝えたい部分が強調されなくなってしまう。

また、序段、第一二段（本段）との関連深いことも特筆に値する。

五、結論

第四章までの考察をふまえて、次のように結論する。

第二段（本段）は、『徒然草』において、非常に重要な段と位置づけられる。そのポイントとなるのが、「つれづれ慰まめと思へど」という表現である。「つれづれ」という言葉は、マイナス表現である。それを晴らすには「慰め」が必要となる。

序段冒頭の「つれづれなるままに」の状況が「慰め」られることは、本書執筆時の、作者の願いであった。（本段）では、その前提が、「慰め」られるはずだと、もっとも期待された友人をもつてしてもかなえられないことが判明したと述べられている。つまり、序段の作者の執筆動機は、はかなくも消え去ってしまった段なのである。

このヒントとなった直接の体験（具体例）が、第一一段の「神無月の比、栗栖野」だと思われる。つまり、現実の世の中には、自分を慰めるものはないと、経験によって気が付いた一段なのである。

第一段から、人間の欲望を次から次へと連想的にとりあげ、戒めてきた作者は、第一〇段で、「家居のつきづきしく、あらまほしきこそ、仮の宿りとは思へど、興あるものなれ」として、住居に目を向けた。その段中に、「大方は、家居にこそ、ことごまはおしはからるれ」と記されている。第一一段は、それを受けていると考えられるのである。また、第一

〇段の中に、「前栽の草木まで心のままならず作りなせるは、見る目もくすしく、いとわびし」と「わびし」というマイナス評価の存在することも注目される。

第一一段では、「神無月の比、栗栖野」を過ぎて、「心細くすみなしたる庵」があった。作者は「かくてもあられるよと、あはれに」見たのだが、それが「大きな柑子の木」が「まわりをきびしく囲ひたりし」という様子を見て、「少しことさめて、この木なからましかば」と思われたというのである。これは、絶望感とまでは言えない。見かけの住居の様子に騙された「失望感・幻滅感」というところであろう。

第一二段は、それを受けての発想であるということが考えられる。

そして、具体的ではなく、抽象的なレベルまで、文章を引き上げた段と言える。つまり、「随筆文学」としての彼の、『徒然草』の最初の、確実な、到達点が（本段）と考えられるわけである。段末に「まめやか心の友には、はるかにへだたる所のありぬべきぞ、わびしきや」とあることに注目してみたい。第一〇段の「わびし」がここにも用いられていることに注目してみたいのである。「わびし」という単語が第一一段を間において、第一〇段と第一二段をつなぐ役割を果たしているのではないかということである。実際「わびし」という用例は、本書中、六例しか使われていないのであるから、その可能性は高い。そこで、第一二段は、本作品冒頭から続く流れをうけ、そこから発想され、記述されたものと位置付けたいのである。

通説のごとく、本書の本文が、基本原則として、現在の段の配列にし

たがつて書き続けられたとするならば、第一二段〈本段〉の価値は、現在のわれわれが考えているよりもはるかに重要であると言えよう。

また、続く第一三段は、〈本段〉との関連が強い。まさに連続している。以下、作者の連想は続いていくと考えられる。

本段の成立は、冒頭からの流れを受け、様々な欲望を慎む姿勢の中で、もつとも望まれるものの一つ、「まめやか心の友」は存在しないことに気が付いたことによる。「ただひとりあるこちやせん」とか「まめやか心の友には、はるかにへだたる所のありぬべきぞわびしきや」と表現させた、そうせざるをえなかったのは、彼の「失望感」といつてよいかと思われる。最後の頼みの綱の友人にも見放され、「うらなくいひ慰まんとせられしかるべきに」「つれづれ慰まめと思へど」と表現せざるをえなかった彼の心の動揺、それがいわゆる、「難しい」表現をとるに至ったのではないか。それこそが、日記的な具体的な内容ではなく、随筆文学という、抽象的な、より高度な内容をもたらしたものと推定したい。

さらに、〈本段〉が、後に続く段にも連想的に影響を及ぼしているのは明らかである。その影響は、第一七段まで続くことが検証された。また、そこから、第五段から第一七段は一段ととらえるべきで、三段に分けることが、作者の真意を伝える障害となっていることも検証された。

まとめとして、〈本段〉、すなはち、第一二段の本書における価値について、非常に重要な段であるという認識をあらたにすべきということ強く主張するものである。

注

- (1) 『徒然草全注釈 上』角川書店・安良岡康作（昭和42年2月10日刊）
- (2) 『徒然草 諸注集成』右文書院・田辺爵（昭和37年5月5日刊）
- (3) 『徒然草講座 第二巻』有精堂（昭和49年7月20日刊）
- (4) 『徒然草 研究と講説』桜楓社・佐々木清（平成4年11月30日刊）
- (5) 『徒然草の鑑賞と批評』明治書院・桑原博史（昭和52年9月25日刊）
- (6) 『諸注集成』に、「現代風な知的理解を求めようとするのは、無理ではあるまいか。問題語の『はかなきこと』『つゆたがはざらむ』『げに』『争ひにくみ』『さるからさぞ』『げには』『かこつた』『心の共には』の探究とともに、文脈の呼応をのみこむことが必要であって、相当、手におえない文章である。なお後考を待つ」とある。
- (7) 『徒然草』日本古典文学大系・小学館・西尾実（昭和46年8月10日刊）
- (8) 『全注釈 上』に、『に』は比較の標準を示す助詞であろう。そう解してみても、下の『はるかに隔たる』が生きてくるように思われる」とある。